

強者の戦略

こんにちは。日本史の岡上です。あっという間に2010年となりましたね。これを書いている今はちょうどセンター試験も終わり、私の担当する生徒も悲喜交々、慌ただしくなってきました。最後まで志望大学目指して努力を続けてほしいと願うばかりです。

さて、今回で「東大日本史のみかた」も4回目となりました。みなさん、どのような解答が仕上がったのでしょうか？今回取り上げた東大日本史の第4問は「昭和恐慌と農村」についての問題でした。図（グラフ）の読み取りで身構えた人もいたと思いますが、テーマとしてはオーソドックスなものであったと思います。

とはいえ「昭和恐慌」については「金解禁」や「世界恐慌」など経済の絡む範囲であり、分かったようでいて、いざ論述するとなると頭を抱えてしまう、そんな範囲かもしれませんね。そこで、今回は「昭和恐慌」とその背景知識をおさらいしてから、問題の解説をしていきたいと思います。

<「昭和恐慌」を考える>

(1) 金本位制とは

近現代の経済史を理解する上で必ず登場する「**金本位制**」ですが、みなさんはどのように理解しているのでしょうか？一般的には「紙幣が金に交換できる制度」と説明したりしますが、では何のために？と突っ込まれると回答に窮してしまうのではないのでしょうか。そこで、まずはこの「金本位制」について理解を深めましょう。

金本位制が重要な役割を果たすのは、外国との取引を行う場合においてです。外国と取引をする場合は国によって経済事情が異なるので、国内で使用されている貨幣では売買ができません（日本では円、アメリカではドルといったように、異なった貨幣を使用する。当たり前のことですよ）。

そこで**共通の価値をもつ金を基軸にして各国の貨幣の交換比率（レート）を設定しようというのが金本位制**です。つまり、金本位制によって外国間の取引がスムーズに行われることになります。

ちなみに日本は日清戦争で得た莫大な賠償金を元手にして、**1897年に貨幣法を制定して金兌換（金と貨幣が交換できること）ができる金本位制の国となりました**。ここでは、当時の日本の経済状況にあわせて1ドル＝2円、1円＝金0.75g（100円＝49.85ドル 0.15ドルは金兌換の手数料）というレートが設定されました。

貨幣法（1897年）

100円 = 金75g = 49.85ドル

※価値の変動の少ない金を基軸にすることで、円とドルの交換比率（為替相場、レート）は安定する。

金本位制では、外国からモノを買った場合は金で支払い、売った場合も金で支払うことになります。ですから、国間で金が行き来することになりますので、**金輸出が可能な制度**とも表現できます。しかし、実際取引において金が国の間をいちいち移動する（金現送といいます）となると大変ですよ。そこで、ほとんどの場合は、金は移動させず為替で決済を行うのが普通です。

具体的には、第一次世界大戦前まではロンドンが国際金融の中心市場として、各国の信用取引を集中決済する役割を果たしていました。例えば、日本がアメリカに生糸を輸出し、ドイツから染料を輸入したと仮定しましょう。その際は、アメリカへの生糸輸出の代金をポンド手形でロンドンで受取り、そのポンド手形を今度はドイツへの染料輸入代金の支払いにふりむけてロンドンで支払います。このようにすれば日本はポンド手形で国際的な受取・支払勘定を集中相殺し、その差額を金現送で清算すればよい

強者の戦略

のです（さらに言えば、受取超過で余った資金はボンドの形でロンドンに置いておいて他日の支払いに充てたり、不足の場合はロンドンの市場でボンド資金を借り入れて支払うことができました）。このように、ロンドンの金融市場はまるで一国の中央銀行のような役割を果たしたのです。

（２）均衡財政と積極財政

さて、金本位制の役割については理解できましたか？次に均衡財政と積極財政について、少しお話をしておこうと思います。

金本位制を行うと、当然国が保有する金の量によって国内の貨幣量は制限を受け均衡財政をとりませんが、金本位制を停止した場合には貨幣量の制限がなくなり積極財政を行うことができます。

もう少し詳しく説明すると、貨幣量が増えれば、市場に流通する貨幣量が多くなるので景気も良くなり、消費が伸び、産業も発展します。しかし、産業の発展に伴って、外国からの原材料の輸入が増えることになるので、その支払いが増加し、貿易収支は悪化します。その時、金本位制をとってれば、緊縮財政や重税によって国内の貨幣量を減らし調整を図ることになります。しかし、その結果は不況をまねきますので産業は停滞し、産業の合理化が進むことになります。すると外国からの輸入も減り、また国内でも消費が抑制されて物価が下がります。ただし、物価が下がると外国向けの日本製品の価格も下がり、さらには産業の合理化で日本企業の国際競争力は向上しますので、少しずつ輸出が増加し、少しずつ金が外国から入ってきます。そこで、その金の分の貨幣を増量して財政を回復させることができます。これが均衡財政です。

一方、金本位制を停止している場合は、いくらでも貨幣を増やすことができます（兌換をする必要のない不換紙幣を増刷できるわけです）。その結果、産業は発達し、設備投資も盛んになります。しかし、貨幣量の増加はインフレを引き起こしますし、産業

が発達する分、外国からの原材料の輸入量などが増加するので国際収支は悪化します。そこで政府は為替管理を行って輸入規制をかけたり、低為替政策で輸出拡大を図ったりします。さらに生産力が上がれば、それだけ市場が必要になりますので、大陸への進出が不可欠になります。これが積極財政です。

ちなみに**均衡財政を主張したのは憲政会（後の立憲民政党）**です。均衡財政では基本的に英米との協調が保たれるので、**外交は幣原喜重郎を中心とした国際協調外交が展開**されました。



幣原喜重郎

一方、**積極財政を主張したのは立憲政友会**で、積極財政では不透明な為替管理や積極的な**対外進出による英米との摩擦が起こる**ことになりました。

（３）大正時代の経済状況

第一次世界大戦中、日本はアジア市場の独占と交戦国の軍需拡大により空前の**大戦景気**をむかえました。1917年には日本は輸出拡大を図るため、**金輸出禁止（金本位制の停止）**を行い、積極財政をとることになりました。しかし、大戦が終了すると列強が経済力を回復し始め、一方で日本は軍需比重が高く、国内市場が狭いという産業構造上の問題を抱えていたため、**戦後恐慌**が発生しました、そして、1923年の関東大震災の発生に端を発する**震災恐慌**が起こり、さらにはその震災恐慌の処理も不完全な状況で**金融恐慌**が発生しました。

（４）昭和恐慌の発生

第一次世界大戦の頃には金本位制から離脱していた列強も、1920年代にはほとんど金本位制への復帰を果たしていました。度重なる恐慌の発生で金融・財政とも安定しない日本経済にとって、為替相場を安定させ、輸出を促進して景気を回復するためにも、金本位制復帰が重要な課題となっていきました。

強者の戦略

このような状況の中で成立した**浜口雄幸立憲民政党内閣は、大蔵大臣に井上準之助を起用し、金本位制の復帰（＝金解禁）を目指しました。**



浜口雄幸



井上準之助

一方では外務大臣に幣原喜重郎を起用し、国際協調外交を展開、特に軍縮を促進し、先の田中義一内閣が山東出兵を行ったのに対し、中国への軍事出動はしない意味での対支親善を図りました。

さて、**井上準之助は金解禁の準備を行うため今までの積極財政を転換し、緊縮財政と産業合理化を推し進めます。**もちろん、緊縮財政によるデフレの誘発と産業合理化による労働者の賃金カットやリストラに対しては大変な抵抗がありました。そこで、この時期、政府は金解禁と緊縮財政に対する国民の支持を得ようと大々的なPR活動を行っています。例えば、1929年8月28日には浜口雄幸首相自ら全国中継放送で国民に呼びかけを行っています。当時の雰囲気か幾分か伝わると思いますが、少し引用します。

「…今日のままの不景気は底の知れない不景気です。前途^{あんたん}暗澹たる不景気です。これに反して、緊縮、節約、金解禁によるところは底をついた不景気です。前途^{こうこう}に皓皓たる光明を望んでの一時の不景気です。…我々は国民諸君とともにこの一時の苦痛を忍んで、後日の大なる発展を遂げなければなりません」

当時の不景気を「暗澹たる不景気」とし、金解禁と緊縮財政によって起こるであろう苦痛（デフレ）を「皓皓たる光明」という希望にあふれた言葉で包み、国民に甘受してもらおうとしていたのですね。

さて、このような諸々の準備の結果、金解禁の前提条件が整ったとみた政府はついに、**1930年1月に金解禁を実施**しました。



金解禁を行う井上準之助

しかし、おりしもアメリカの恐慌（ウォール街の株価大暴落、暗黒の木曜日）に端を発する**世界恐慌が発生し、金本位制に復帰した日本は、まさに“嵐の中で雨戸をあける”ような状態となり、輸出は激減して輸入超過が続き、金の海外への流出が起きました**

（わずか2年間で約7億3000万円の正貨（金）が流出したといわれています）。そのような状況下で、**均衡財政を進める政府は一層デフレを強めていきました。アメリカの不況による生糸輸出の不振、デフレによる失業者の増大により経済は混乱し、昭和恐慌が発生**しました。しかも、この時期には植民地米の増産による米価下落に加え、デフレによる農作物価格の下落、工場の閉鎖に伴う農民の兼業機会の減少、加えて東北の飢饉などで**農村恐慌**も起こりました。農村では欠食児童や、娘の身売りといった状況が散見されるようになり、生活の苦しくなっ



欠食児童

た中小地主は土地を手放したり、小作地を取り上げようとしたため、各地で激しい小作争議が起こることになりました。

こうした経済政策の失敗と農村の惨状を背景として、民間の農本主義者・国家主義者の団体や軍部の青年将校を中心にして、政党政治・協調外交や財閥の打破を目指す**国家改造運動**が活発となりました。とりわけ政党と財閥の癒着は非難の対象となり、金輸出再禁止による円安ドル高を見込んで、**ドル買い**を行い巨額の利益を得たと噂された三井財閥は攻撃的となりました（1932年に井上準之助、三井合名理事長団琢磨が相次いで暗殺された血盟団事件は、

強者の戦略

ここに起因するわけです)。

<問題の解答解説>

さて、昭和恐慌とその背景をみてきましたが、しっかりと理解できたでしょうか？ここから今回の問題の解答解説に入りたいと思います。

まずはいつものように設問、そして今回は図(グラフ)から情報を正確に導き出していきます。

設問より

テーマ：「昭和恐慌」の際の、現在とは異なる「農村の危機」の内容と背景

条件：①図を手がかりにする

②与えられた語句(失業者・農村人口・米価・養蚕)を使用する

さて、さらに設問文を詳しく見ていくことにします。この問題では「昭和恐慌」の際の「農村の危機」とは何かが問われていますが、「現在とは異なる」とわざわざ強調されている点に注目ですね。つまり、この問題では「昭和恐慌当時の農村の危機」と「現在の農村の危機」の“違い”というものを明確にする必要があります。それをふまえて、今度は図(グラフ)の読み取りに移りましょう。

まず1930年(昭和恐慌当時)と2000年(現在)を比べると、まず目につくのは農林水産業就業者が実数も全体に占める割合も激減していることです。そして、この農林水産業就業者の減少がいつから顕著になったのかといえば、1960年代以降であるということが読み取れます。

つまり、「現在の農村の危機」とは高度経済成長によって生じた“農村の解体”であると考えられます。ちなみに設問文で指摘されている内容とも一致しますね。

では一方、「昭和恐慌当時の農村の危機」とは何に

なるのでしょうか？図(グラフ)では1910年から1930年にかけての変化を読み取ってみても、農林水産業就業者の全体に占める割合が微減していることぐらいしかみられません。ですから、ここでは危機の内容が“農村の解体”とは「違う」ということが最大のヒントになるわけです。さて、もうおわかりですね。そうです、「昭和恐慌当時の農村の危機」とは農業恐慌による農村への打撃であるということになります。

よって、あとはこの農業恐慌の内容と背景をまとめていけばよいでしょう。

<農業恐慌の背景>

- ①植民地米の増産やデフレによる農作物価格の低迷(米価の下落)
- ②世界恐慌によるアメリカへの生糸輸出の低迷(繭価の暴落)
- ③産業合理化や昭和恐慌による倒産の増加(失業者の増加)

<農業恐慌の内容>

- ①農村の生活基盤である米作・養蚕の低迷
- ②都市で発生した失業者の帰村
- ③不況下の農村の経済状況に比して農村人口が過剰となり困窮が深刻化。欠食児童・娘の身売り・小作争議の増加など様々な社会問題の発生。

ちなみに図(グラフ)からは農村恐慌により農業人口がどのように変動したのかは正確に読み取ることはできません。そこで単に「失業者の帰村によって農村人口が増加した」と表現してしまうと、問題の前提である図(グラフ)を無視することになります。よってここでは不況下の農村の経済状況に比して農村人口が過剰となったことで困窮が深刻化し、欠食児童・娘の身売り・小作争議の増加といった社会問題につながったという表現が妥当であると思います。

強者の戦略

以上をまとめて、解答を作成すると次のようになります。

【解答例】

昭和恐慌により、かねてより低迷していた米価は暴落し、アメリカへの生糸輸出の低迷により繭価も暴落、米作と養蚕を生活基盤とする農村は打撃を受けた。一方、都市で生じた失業者の帰村が相次ぎ、不況下の農村の経済状況に比して農村人口が過剰となったことで困窮が深刻化し、欠食児童など様々な社会問題が起こった。(147字)

さて、いつものように論述問題の解答はもちろん一つではありません。「これはどうだろうか?」「これではだめなのか?」と自分では判断つかないものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はここまでにいたしましょう。ここまで4回にわたって東大の2009年度の問題をみてきましたが、どの問題も第一回の冒頭でも書かせてもらいましたが、教科書の内容を基本に置きながらも、教科書には十分に記述しきれていないような歴史的な見地に立った出題でしたね。そこが東大日本史の難しさであり、面白さであると思います。さあ、今年度はどのような出題がされるのでしょうか?楽しみですね。

それでは次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに!!